



京都教区時報

特集 — 四旬節司教教書
小教区の頁 — 宇治教会

第72号

発行所
京都市中京区河原町三条
カトリック京都司教区
広報室(Tel 211-3768)
編集責任者 村上透磨
編集部 教理センター
田中司教認可



パパさまに お会いして

教皇のやさしいほほえみ、力強い言葉、広いあたたかい手の感触は今だに私達をとりこにして放さない。東京、広島、長崎に於いてなされた教皇の慈父としての言葉は、新聞、テレビ等を通じて報じられずでに御存知の方も多しと思われるし、又全記録が後程まとめて発行される筈である。

東京で行われた信徒代表とのつどいは、当教区より代表し、岩井洋、藤井実、三俣俊二、伊藤武志、黒沢弘和の五氏が参加した。彼等の感動と喜びは私達のものであり、彼等と共に永遠への祝福は我々へのものである。その印象と報告を三俣氏にお願いした。

「私は雨を持って来ました。」のお言葉の通り、二十三日午後の東京地方は、雨の降りしきる寒い冬の空模様、それにもかかわらず、会場は教皇さま歓迎の熱気に包まれていました。聖職者の集い、ゼノ修士との謁見に引き続き、五時二十分頃から信徒代表74名との集いが開かれ、席上、教皇さまから英語で概略

次のようなメッセージを戴きました。

「日本では信徒の果たす役割が非常に大きい。これは布教の暁からそうでした。司祭、修道者と同じく信徒が殉教してキリストを証明し、あるいはまた、聖フランシスコ・ザベリオの右腕となって働き、聖人を日本へと導いたのも実に一信徒アンジローだったのです。このように日本教会の黎明期に思いを馳せることは、現代の教会における信徒の使命の美しさと深さを理解する上で非常に有益なことです。日本の信徒の数は極めて少ないが、この信徒は、言葉と行動によって福音の滲透を計り、キリストのメッセージと恵みとを分配するという独特の責任が委託されています。日本の教会にとって、信徒の役割は絶対に欠かせないものです。」

その後、代表個々との謁見に入りましたが、教皇さまは終始お優しい態度で一人一人にお言葉をかけられ、全員と握手、あるいは肩を抱き、あるいは抱擁されるなどして激励なさいました。私たち京都教区代表は五人でしたが、京都地区から来たことを申し上げると、「京都ですか」とうなずかれたので、「京都をご存知ですか」とうかがうと、「よく知っています。けど何もかも地図の上のことだけです。」とほほえまれ、最後に一人一人に神の祝福があるようにとお言葉を下さり、教皇さまの紋章の入ったロザリオとメダイトをめでめいの手のひらに押し込むように握らせ、さらにその上から暖かく大きな手で包み込むようにして握りしめて下さいました。一人一人を大切にされる、文字通り平和の使者といったお姿が、今もまぶたの中に残っています。

(草津教会 三俣俊二)



教区短信

- ▽ 3月16日 ⑩ 邦人教区司祭月例会
- ▽ 3月19日 ⑩ ウィチタ・ヨゼフ修道会 誓願式
- ▽ 3月21日 ⑩ ドミニコ女子修道会誓願式
- ▽ 3月24日 ⑩ 教区幼稚園教職員研修会
- ▽ 3月29日 ⑩ 大和八木教会堅信式
- ▽ 4月12日 ⑩ 山科教会堅信式
- ▽ 4月16日 ⑩ 聖木曜日。聖香油のミサ、教区神学生宣教奉仕者選任式(河原町)
- ▽ 4月19日 ⑩ 復活の主日
- ▽ 4月20日 ⑩ 邦人教区司祭月例会
- ▽ 4月26日 ⑩ 宮津教会堅信式
- ▽ 4月29日 ⑩ 修女連
- ▽ 5月2日 ⑩ 4日 ⑩ 第1回ビジョン作り合宿(北白川教会)
- ▽ 5月4日 ⑩ カロンデレット・ヨゼフ修道会25周年
- ▽ 5月5日 ⑩ 高山右近祭(大和榛原)
- ▽ 5月10日 ⑩ 西院教会堅信式
- ▽ 5月12日 ⑩ 15日 ⑩ メリノール会日本管区総会(関西セミナー)
- ▽ 5月16日 ⑩ 17日 ⑩ 第2回ビジョン作り合宿
- ▽ 5月17日 ⑩ スタインバック師金祝記 念ミサ(河原町)
- ▽ 5月18日 ⑩ 邦人教区司祭月例会
- ▽ 5月19日 ⑩ 23日 ⑩ 司祭協議会
- ▽ 5月24日 ⑩ 子羊会25周年(高野)
- ▽ 5月31日 ⑩ 信長四〇〇年祭、安土セミナリ日記念ミサ

あらゆるもの前に

ひびきあふる

——ビジョン作りから——

越 知 健

「京都教区のビジョンをみんなが作る」との呼びかけがあり、多くの方の協力が始まって、二年たちました。現在もこの動きは進行中で、最終作業の第三段階にはいろうとしています。今迄のことを振りかえつて、反省と気がついたこと、そして今後の希望を書かせていただきます。

最初の頃は、「いったいぜんたい、何んてことを始めてくれたんだ。会議の時間はやたらに長くなるし、小教区の行事計画はくるつてしまふし、その上、最もにくたらしいのは、上から理想狂のようなものを押しつけてきたことだ。現場を知らない、暇をもてあました神父殿の考えることときたら、どうしようもない」と言った、ビジョン作りに対して「猛烈な拒絶反応が、ごうごうと教区全体に広がっていました。と同時に、全く思いもよらない質問を受けたこともありまして「神父さん、教区に美女をつくるのですか?」みなさんも憶えていくくださるかも知れませんが、昨年十一月に教区時報の「ビジョン作り」の号外を読んだ伏見教会のK子さんは、久しぶりに電話をかけてくれました。「神父さん、ついにやらはったんですね。司教さんにもはい

つてもらった野球チームをつくらはったんですね……」笑ってすませれば、それですみませけれど、よく考えてみますとやはり大変な問題で、淋しいと云うか、なんとも複雑な気持ちでした。

何故ならこのビジョン作りが始められたのは、十六年前の、ヨハネ23世教皇の、「あらゆるもの前にひびきあふる」ところからだからです。何故ひびきあふる、教えてほしい」と願われたのか? それは、全世界の教会が、キリストの期待に十分に答えていないことを確かな現実として、認められたからでしょう。ここから何とかして、脱出しなければと思われたからでしょう。あらゆるもの前にひびきあふる、これは真の回心を全教会が世界のまん中で、しなければとの強い意志をあらわしています。公会議のあと

のシノドス会議で、教会は「存在するあらゆる不正義の問題を直視する時、今迄の教会の教え方、教育の中味では、対応できなくなつた」ことをはっきりと認めています。(世界の正義)

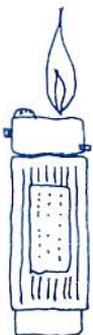
こんなふう書き出すと、また、「本

の中から活字をふりまわしている」とおしかりを受けそうですが、これは活字ではないと確信します。これは不正義に苦しめられ、おしつぶされようとしている人々の叫びを、あらゆるもの前で、ひびきあふる、きき耳を立てた人達が、その叫びをききとって、あらためて行くこととしていた姿なのだと思います。従つてこれは、叫びであり、祈りであり、回心の宣言であると思います。

私は、このビジョン作りの作業の一つ一つを知っているわけでもなく、まして多くのグループの、多くの方の言い知れぬご苦労は知るよしもありません。それで多くを語ることは出来ませんが、直接に見ききしたいいくつかのことを紹介しましょう。三重県のある教会では、ビジョン作りの委員会がつくられ、その人達を中心に公会議の文章研究会が数十回もたれ、多くの話しあいの中で、公会議が受けとめたと同じあの叫びをききとり、それに従つた深い反省と刷新への歩みが始められたようです。このような動きはその後、あちこちにも生まれてきています。規模の大小は、勿論、問題ではありませんが、人数も少なく、なかなか力強い歩みにならないことを心配するむきもありますが、しかしそれらの歩み一つ一つはすばらしいものだと思います。これら一つ一つは、残りの全体をもより動かせてくれると思っています。何故ならそれは神の心を含んでいるからです。

この五月から、いよいよ第三段階の作業にはいりますが、司教様を中心として、信徒、修道女、司祭、青年が一同に会して意見を述べあい、共に祈りながら、教区のビジョンのまとめを作ります。互いによくききあい、よく考え、よく祈りあいたいと思います。あの叫びの前に、ふるえおののきながら、力をあわせて、それに取り組んで行き、神様の息吹きを十分に吸いとっていきたいものです。このビジョン作りの最初の頃、田中司教様は、こんなことをして、教区のみなさんに迷惑をかけるのでないか、と大変心配なさつておられました。先日の司祭の集まりで、ある司祭が、かなり強い調子で「司教様、あなたは、みんなの意見をきいてばかりいないで、もっと命令してください」と言いました。その時、あの真面目が服を着たような司教様は、その司祭に「負けないもつと大きな声で答えられたものでした。「私はみんなといっしょにやつて行きたいのです。その時、そこにいた多くの司祭達は、みんな本当に嬉しそうでした。みなさん、いよいよ作業は、終わりに近づきます。今からでも決して遅くありません。みんなであの声に耳を傾け、京都教区みんなで、神様の期待によりよく応えるものにすべくがんばつて行きましょう。」

(ビジョン事務局)



お知らせ

信徒使徒職養成コース

— みことばと典礼コース

5月2日④、4日④

ピートル宗教研習室(洛星高校)

— 問合せ先— 教理センター (電〇七五
一七五二一〇〇五七)

スライド試写会

教会関係のスライドをシリーズで紹介して行く。河原町カトリック会館6階
4月11日④午後6時30分

「復活は今ここに」(現代的意義)
「聖書のおはなし— あらしをしらずめ
たイエズスさま、他」

5月23日④午後6時30分

「僕ってなに?」(新しい学年をスタートした子供の問題をみる)
「宗教は阿片?」(宗教心から人間を
を探る)

— 問合せ先— 教理センター企画部

(電〇七五—七六一九〇九五)

京都府北部信徒連合信徒代表者総会

4月12日④午後1時30分

綾部カトリック教会

スライバック師司祭叙階金祝記念ミサ

5月17日④午後1時30分

河原町カトリック教会聖堂

高山右近祭

5月5日④。奈良県榛原町

— 問合せ先— 八木教会小山神父

織田信長四〇〇年祭

— 安土セミナリヨ記念祭

キヤロリング、記念碑除幕式、ミサ

5月31日④午前10時

安土セミナリヨ跡

祝・誓願

キリストの呼びかけに生き生きと応えていけるよう、私たち京都教区キリスト共同体は、心を一つにしてお祈りいたします。

メリノール女子修道会 (2月1日)

Sr. テレサ 伊藤照子 (終生誓願)

ウイチタ聖ヨゼフ修道女会 (3月19日)

Sr. マリア・ドロレス 大野えみ (終生誓願)

Sr. クリステイーナ 氏家阪枝 (有期誓願)

聖ドミニコ女子修道会 (3月21日)

Sr. マリア・コンソラタ 佐藤広子

Sr. マリア・レティツィア 桜井洋子

Sr. マリア・ヤヌアリア 熊谷久子 (以上3名初誓願)

(以上3名初誓願)

新学期・新年度に

京都教区へ転入された方へ

ようこそ京都教区へ!

京都教区は、京都府、滋賀県、奈良県、三重県の一府三県からなる教区です。

教区長は、ライムンド田中健一司教。

「まじめが服を着たお方」と呼ばれていますが、心使いが細やかで、実にやさしい司教様です。教区司祭二名、メリノール会をはじめ六十余名の修道司祭、約三〇〇名の修道者、約一七〇〇名の信徒が神の国の建設のために働いています。現在京都教区では「教区ビジョン作り」という、今後数年間の京都教区の方針を、司教、司祭、修道者・信徒が皆いっしょになって考えていこうという運動を行なっています。今は、教会や活動団体などの意見をまとめる段階にきていますが、いろいろな面で、皆さまのご協力をお願いいたします。

長崎移動信徒のつどい

2月8日、

下五島福江、

11日上五島青

方15日平戸で

夫々、今春中

高卒で働きに

出る人々の集

いが行われた

が、私は都合

上2月8日の

集いにのみ初

めて参加した。

今年20名の青少年達が京都地区に来る事

になっている。

彼等の大半は働きつ、学校に行く事にな

っており、学校、仕事の両立、更に寮

のきびしい規則にしばられる事は昔の女

工哀史とはいかなくても想像を超える大

変な事である。私達はただ彼等の行動を

批判するのではなく、あたたかい心で迎

える努力をすべきであらう。



ひとりひとりを大切に 身障者用スロープ作り 西院教会



今回の集いはババ様の訪日と重なり、一時中止する事になってしまったものの、教会の神父様の熱烈な要請によって、この集いもたれた事は、一生に一度しか体験出来なかった彼等にとって、忘れ得ない思い出を残した事だろう。彼等をあたたかく迎えられるように願っている。
(移動信徒担当司祭 滝野)

西院教会では昨年11月、身体障害者用スロープ、専用便所の最低限の施設を教会内に設置する事になった。これは一人一人を大切にするためと、身体障害者の方が容易に教会を訪ねて下さるためのものである。この気運は、教会内体制も漸く充実し、社会に開かれた小教区共同体を真剣に考え始めた一昨年度から起った。資金確保の方法について、信徒会役員会で討議した結果、例年開催のバザーを、「身体障害者用教会施設作り」と、スカウト活動促進の意向で行う事にし、昨年度教会挙げて集中的に取り組んだ結果、予想以上の浄財が集まり、実現におよんだものである。

(佐々木 信)

司教の足どり

一月～三月



- 1月
- 15日 富米師来訪(諸宗教)。小さきイエスの姉妹会シスター来訪。
 - 16日 杉谷・外山師来訪(諸宗教)。
 - 毎日新聞記者と面談。
 - 19日 邦人司祭月例会。東京行。
 - 駐日パチカン大使館訪問。
 - 20日 教皇歓迎実行委員会。
 - 東京神学院常任委員会。
 - 21日 東京神学院常任委員会。レデン
 - プートル会新管区長訪問。帰洛。
 - 22日 小さきイエスの姉妹会シスター来訪。S小教区信徒と面談。
 - 23日 S設計士と面談。
 - 24日 K小教区信徒代表と面談。
 - 25日 ⑩ビジョン連絡会。暁の星幼稚園(伊勢小俣)教諭来訪。
 - 26日 司祭評臨時集会。教区カテキス夕集会。女子カルメル会訪問。
 - 27日 教理センター理事會。O師来訪。
 - 28日 信愛幼稚園ミサ。
 - 29日 東京行。信徒使徒職委員会。
 - 教皇歓迎実行委員会諸宗教関係。
 - 駐日パチカン大使館訪問。帰洛。
 - 30日 司祭評常任委。
 - I小教区代表来訪。
 - 31日 五天主人訪問。
- 2月
- 1日 ⑩河原町ミサ。日本26聖人記念ミサ(四条堀川小寺ビル)
 - 2日 スタインバック師司祭金祝ミサ(唐崎)。(教皇歓迎実行委員会広島委員会)
 - 3日 Sr.マリー・エリス来訪。ネオ・カテクメナーレ代表来訪。
 - 4日 宮津暁星幼稚園教諭来訪。
 - 5日 人類愛善会アジア代表者会議(京都国際会議場)。
 - 6日 東京行。教皇歓迎実行委員会財務担当者打合せ。
 - 7日 教皇歓迎実行委員会。
 - 駐日パチカン大使館訪問。
 - 8日 ⑩老母・老司教を見舞う(坂出聖マルチン病院)帰洛
 - 9日 諸宗教諸本山表敬訪問(教皇訪日接見案内)。
 - 10日 K市長来訪。
 - 11日 教皇歓迎広島委員代表来訪。
 - 12日 Sペール会訪問。
 - 13日 ビジョン事務局。
 - 14日 S設計士と面談。Sr.Tと面談。
 - 15日 マニラへ出発。
 - 16日 FABC会議。FABC夕食会(マニラ大司教館)。
 - 17日 教皇マニラ到着。FABC会議。FABCとフィリピン司教団、
 - 18日 教皇と夕食(マニラ大司教館)
 - 19日 16殉教者の列福式に参列。
 - 20日 帰国。
 - 21日 A町長。S設計士と面談。
 - M氏来訪(信長四百年について)
- 3月
- 1日 ⑩河原町ミサ。沖繩愛楽園病友と
 - 2日 会食。南信連(両)ビジョンの会。
 - 3日 司祭評定例会。
 - 4日 神学生養成担当者会。
 - 5日 東京行。
 - 6日 教皇歓迎実行委員会残務事務。
 - 7日 諸宗教会議(明治記念館)。(JMPCC欠席)
 - 8日 S設計士と面談。
 - 9日 京都北部信徒代表と懇談(舞鶴)
 - 10日 天台ミサ。日星高校卒業式参列。
 - 11日 ビジョン事務局会。
 - 12日 ⑩女子カルメル会訪問。
 - 13日 ビジョン連絡会。
 - 14日 長岡幼稚園カテドラル参詣。
 - 15日 リノール管区長団と会談。
 - 16日 東京行。
 - 17日 東京神学院常任委員会。
 - 18日 日本司教協議会臨時総会。
 - 19日 日本司教協議会臨時総会。
 - 20日 WCRP(法輪閣)。
 - 21日 信徒使徒職委員会(箱根)。
 - 22日 信徒使徒職委員会。帰洛。
 - 23日 レジオ・マリエ・アナエス。
 - 24日 東京行。教皇来日。諸行事に参加。
 - 25日 教皇、日本司教団と夕食懇談。
 - 26日 教皇の東京諸行事に参加。
 - 27日 教皇の広島・長崎諸行事に参加。
 - 28日 教皇、長崎より離日。
 - 29日 深堀仙右衛門司教見舞。帰洛。
 - 30日 東京行。教皇来日。諸行事に参加。
 - 31日 教皇、日本司教団と夕食懇談。

永久保存版

〔教皇訪日公式記録集〕

ヨハネ・パウロ二世

発売中

A4判/極上製/箔押し・箱入り

●定価6500円

主婦の友社刊

製菓材料・舶来食品

和洋酒・修道院製クッキー

ミサ用ブドー酒

タキノ

〒604 京都市中京区錦小路通鳥丸東入

電話 (221) 0976-7

御葬儀一切の業務を厚く皆様に
尽くす事をモットーに奉仕させて
いただきます。

右京区嵯峨野開町

厚志社

TEL 81713506



特集——一九八一年四旬節司教教書

教皇訪日と私たちの信仰実践

——日本地方教会の再出発

京都司教 ライムンド 田中健一



神の憐れみと聖ペトロの後継者のご意志によって京都司教に選ばれている私は、聖なる四旬節に当って、教区内の司祭、修道者、神学生、信徒の一人ひとりに、心からの挨拶と祝福の念をこめて、この司教教書をお送りいたします。

※ ※ ※

申すまでもなく、復活祭に備える四旬節は大切な時期であり、どんなに忙しく複雑な世代にあっても、種々工夫をこらしながら真剣に取り組むべき典礼節だと思えます。「典礼は信条の実践」とも云われ、実践なき信条は本番であり役に立ちません。典礼の意味するところを一つ一つ理解するよう努めましょう。だからこそヨハネ・パウロ二世はこの聖節をご自分の教区で記念すべく、急ぎローマへ帰国されました。

※ ※ ※

残された私たちにとって、二月二十三日から二十六日までの教皇日本巡礼は、本当に大きな神の恵みであり、その強烈な印象は私たちの悩裏

に深く、温かく刻み込まれ、それに対する心の反応を言葉で表わす事は困難であります。私はマニラでの列福式にも参加させて頂き、日本では東京、広島、長崎へと教皇様の側近く接する機会を多く頂き、これは京都司教区の第一の奉仕者、司教であるが故であり、即ちみなさまの故であり、厚く御礼申し上げます。

訪日中の教皇の言動は、高度に発達したマスメディアを通して国内、国外に報道され、種々の都合で行事参加を犠牲的に断念して下さった方も、テレビやビデオや新聞等で、その殆んどすべてをご存知の事と思えます。沢山の教皇スピーチは日本語に訳されてカトリック新聞などで紹介されますので、是非それを注意深く読み、信仰の心で味わって頂くようお勧めいたします。

※ ※ ※

ところで、あらゆるマスコミは口を揃えて教皇訪日を、聖フランシスコ・ザビエル以来の最大事として連日トップニュースで、全世界に知ら



東京・武道館で

せました。教皇様の広島での力強い平和アピールは九ヶ国語で。――
 「過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことです」と繰り返しつつ、原爆の恐ろしさから平和獲得への努力を全世界に訴えられました。私はその時、ひそかに日本の教会の歴史を振り返って見ました。キリシタン大名の時代、二世紀以上に及ぶ大迫害と殉教の時代、明治になって建前論としては信教の自由が与えられたものの、やはりキリスト教は外国の宗教として危険視され、日本の風土に合わないものとして敬遠されて参りました。しかし選ばれた器、教皇ヨハネ・パウロ二世の今回の信者としての訪日巡礼は、信者ばかりではなく、日本のすべての善

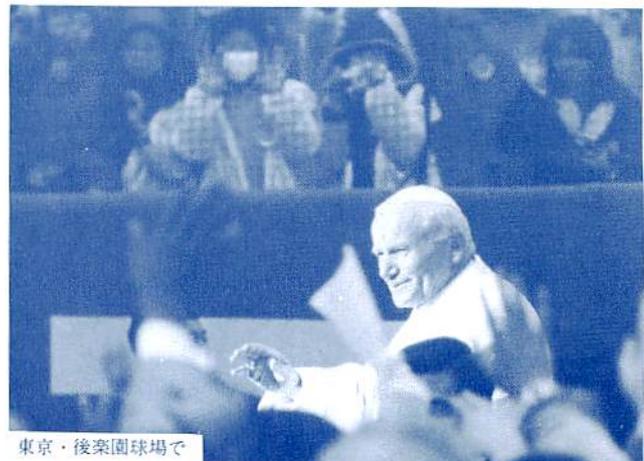
意の人びとに、好感をもって受けとめられ、タボル山のように、偽りなき神の愛が垣間見られ、別の言葉で云うならば、長い長いキリシタン禁令が、名実ともに終了したかのような強い感じがいたしました。その代りに将来に対する責任と申しますか、信者に対する重大な使命と課題を与えられたような感じも強かったです。今こそは日本の地方教会の再出発の時だ

と思えます。

※ ※

もしみなさんの誰かが或友人から「あなたはカトリックですか？ カトリックでは何を信仰するのですか？」と尋ねられた時、「そのような事は司祭かシスターに尋ねてください」と云わないようお願いいたします。

第二バチカン公会議は確認しております。洗礼を頂いた私たちはみなキリストの



東京・後楽園球場で

預言職、司祭職、牧職に参与しているものであります。この所謂「神の民」の基本的使命は、自分が信仰させて頂いている福音を宣言すること、宣教者であることです。自分の言葉、生活の証しによって私達は神の国のしるし、道具となるべく強く招かれております。すべての人はこの福音を知る権利をもっているのです。勿論このためには私たち信者の成長、改心、刷新が大前提となります。古い諺に「人を見て法を説け」とありますが、相手の心情を大切にしながら自分一人で受けとめる事が出来ない時には、信仰共同体で暖かく迎え入れて下さい。幸いなことに京都教区では、或人びとからの盛り上りによって過去一年間ビジョン作りの名の許に九つのグループ群に分かれての信仰の見直しが続けられて来

ております。みなさんの犠牲的努力には感謝で一杯です。このプロセスは今後、収集、分析、反省、まとめの段階を祈りと合宿などを通して進めて行こうとしています。このような努力は教皇訪日によって日本の地方教会に課せられた新しい教会づくりに大きく役立つものと思います。

※ ※ ※

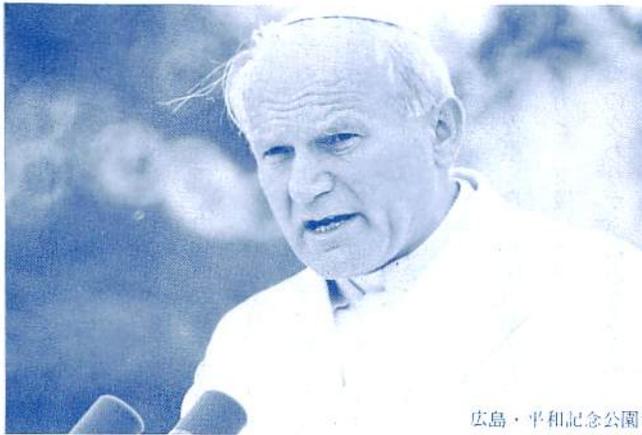
抽象的な事ばかりを述べましたので、教皇様と近く接して感じさせられた具体的な点を二、三お伝えする事を許して下さい。

(1) 普遍教会の第一の奉仕者である教皇様は、現代世界の危機的現状をすぐ痛感、体験しておられると思います。それは政治、経済、社会その他複雑な構造の許に形造られたものでありましようが、それだけに必死になって世界各地を信仰者として巡礼し続け、福音の精神を訴えておられるものだと思います。島国に住む私達はこの点で、もっと目覚め他者の現状に対して広く公平な眼を開き、世界連帯の時代に沿わなければ教会の使命を十全に果たすことができないと思います。即ち世界に、アジアに、国内に、地域に、共同体内部にも開かれた信仰者に変身することです。

(2) 普遍教会の第一の奉仕者である教皇様は、一人ひとりを本当に大事になさるお方だと信じます。将来を背負う子どもや若者は申すに及ばず、苦しむ者、悩める者、病める者の中にキリストを見出しておられるようであります。例えば原爆病院を訪問される場合、ベッドに釘づけられたキリストを拝みに行くのだと、患者さんの中におられるキリストを拝む気持ちで一人ひとりに接し、相手を慰めるよりも自分が相手から教皇としての使命に信頼をもって応えて行くべき恵みと力を頂くのだとい

ったご様子が感動的でした。これは敵をも大事にするという最も困難な課題にもキリストの力によって取り組まれるものだと思います。

(3) 普遍教会の第一の奉仕者である教皇様は同時に、本当に多く祈る方だと思いました。信仰生活の源泉であり、頂点であるミサ聖祭を共同司式させて頂く時、そのお姿の中から強く強く感じさせられました。又同行中の特別機の中でも、私たちは行事のことや、その報道の事などについて話し合うのですが、教皇様は一人静かに席に座って、「教会の祈り」を全世界を代表するかの如く御父に捧げておられました。又、早朝から分刻みのスケジュールを終えられて夜も十一時半を過ぎ、「それではお寝



広島・平和記念公園で

み下さい」と挨拶をすると、「チャペルはどこにあるのか」と尋ねられ、それからしばらくの間お一人でご聖体の前にひざまずき静かに祈っておられた、と伺いました。教皇様のあの超人的なエネルギーは、若い時にスポーツで鍛えられたご自分の体からだけのものではなく、むしろ大部分は外から、神から頂いておられるのだ、と思いました。

※ ※

復活祭を準備するこの聖な

る四旬節、教皇様を通して
 神が私たちに送って下さつ
 た信仰者への呼びかけの恵
 みを、大きな信頼と愛をも
 つて素直に受けとめたいも
 のであります。

「愛することは美しい。
 しかし苦しみつつ愛するこ
 とは更に美しい」という言
 葉がありますが、他者への
 愛を少々痛みを感じながら
 も勇気をもって関わって行
 く恵みを願いましょう。

今年は「国際障害者の年」

でもあり、四旬節中の愛の運動は例年のようにカリタス・ジャパンが窓
 口になって皆様のご協力をお待ちしています。この点についてもみなさ
 んの信仰体験から溢れる寛大なご協力を切にお願い申し上げます。

※ ※ ※

日本の教会は本当に「小さな群」であります。旅する私たち後輩を
 励ますために祭壇の栄誉を受けている殉教者の数は他国に例を見ない程、
 沢山頂いております。若し私たちも、心の中に聖霊の働きの場を十分に
 備えるならば、形こそ異れ、現代世界において司祭として、修道者とし
 て、神学生として、信徒として立派に使命に就いて行く事の出来る地方



長崎・松山陸上競技場で

教会を築くことが出来ると思えます。先月中旬、マニラで行われた十六
 名の殉教者列福式の最後の列にも京都のラザロと呼ばれる一信徒がおら
 れました。二十六聖人、二百五福者そして今回の十六福者は特にアジア
 の中で特別の使命をもつ日本の信仰後輩者、私たちのために、常に聖な
 る御父の前であつて力強い取り次ぎを続けて下さるものと思えます。

どうか殉教者の元后でもあり、キリストの母、私たちの母である聖母
 マリアのお取り次ぎによって、私たちが少しでも現代世界の中にあつて、
 神の国のよきしるし、道具となり、地上でゆるされた生命を、復活信仰
 への完全燃焼に導いて下さるよう心一つにして祈りたいと思えます。

※ ※ ※

私のような至らない教区の奉仕者に示して下さい、主におけるみなさ
 まのご協力とご支援に感謝しつつ。主イエズス・キリストの恵み、神の
 愛、聖霊の交わりが常にみなさんの上に豊かでありますように。

一九八二年三月八日 四旬節第一の主日

多くの教会で見られる風景です。ミサが始まった時には、まばらに信者が座っていた聖堂に、ミサが進むにつれて、だんだん数が増し、聖体拝領の頃には、もう座れない程多くの信者が、後ろのほうにあふれている風景。果は私も時々、ミサに遅れてきて、説教の途中や奉納のころからあずかることがあります。そして、信仰宣言を唱え、感謝の典礼ではその名のごとく、賛美と感謝をささげて祈り、有難く聖体をいただいた、満足して聖堂を出ていくのです。

しかし、ちょっとここで考えてなければならぬことがあります。私は信仰宣言を唱えました。でも一体、何に対して私は信仰を宣言したのでしょうか。私は賛美と感謝をささげました。でも、どうしてしかも何に感謝したのでしょうか。聖書朗読を抜かしてミサにあずかっている私には、「この質問に」「わからない」としか答えることができません。

私たちの信仰は、まず「聞く」ことから始まります。(ローマ10:17)すなわち、従順な態度で神のごとばを「聞いて」、初めて、信仰というものが成り立つのです。私たちはまず「神が私たちに何をしてくださったのか」を「聞かなければ」、賛美も感謝もささげることができません。「聞いた」ことに対する答えとして、賛美と感謝が出てくるのではないのでしょうか。その時点で、力強く生き生きと宣言される「ことばの典礼」なしには、もはや「感

謝の典礼」は考えられないのです。

このように考えてくると、「ことばの典礼」を何となくおろそかにしてきた私の今までの態度は、反省されるべきものであると思うようになりました。そして、日曜日にはミサに遅れないように、あと20分早く起きる努力をしています。

では、私たちはどのように「ことばの典礼」にあずかればいいのか。

まず朗読者。「信者が神のごとばの朗読を聞いて、聖書の快い生き生きとした感銘を心に受けるよう」(朗読者は)「真にふさわしい者であり、よく準備のできた者でなければならぬ」。(ミサ典礼総則66)私も時々聖書朗読をすることがあります。でも私は「よく準備した、わしい朗読者」とは言えそうにありません。ミサが始まる直前に、朗読箇所を目を通して、読めない漢字を確認し、区切り方を考える。とにかくスムーズに読めればよいと思って、懸命に字句を追って行く。時には、読むことは読んだもの、読んでいる私本人が、その朗読箇所の意味をよくわかっていないこともあるのです。こんなことで、聞いている人に「快い生き生きとした感銘」を与えることができるのでしょうか。キリストご自身が現存した「ことば(総則9)」を力強く宣言できるのでしょうか。

シリーズーミサ

ことばの典礼

朗読の意義

視覚的要素なども必要です。これは私の提案ですが、朗読者のトレーニングコースなどが、もっと身近にあってもいいのではないのでしょうか。

次に私は「聞く」方の立場にまわってみました。「聞く」ということは、何か受身の姿勢のような気がします。けれども実は、立派に積極的な態度なのです。私たちの耳には耳ふたというものはありませんが、どんなにすばらしい神のごとばが聞こえても、それを積極的に「聴かなければ」、私たちの心の中に響いて「ことば」でしよう。ミサにおいて大変重要

な、この積極的な参加がなければ「ことばの典礼」は無意味なものになりかねないのです。

ところで、たいいていの教会では「聖書と典礼」というパンフレットを朗読の際に併読していることでしょうか。私も何となく、朗読のスピードに従ってそのパンフレットに目を通していきます。週日のミサなどで、朗読の際に見るものがないと、何か不安で落ちつかなくなることもあります。しかしここで考えておかなければならない点は、「ことばの典礼」の際には「聞く」ことが最も重要であるということ。聖書と典礼」は朗読の際に私たちが「読む」ためになるのではありません。それは、朗読の解説や「聞く」ための補助として存在しているのです。立派に編集された「聖書と典礼」の存在使命を生かすのも殺すのも、私たち次第でしよう。いつも「読む」ことはサブで、「聞く」ことがメインであることを忘れないようにして、そのパンフレットを上手に使っていきたいものです。

その他、「ことばの典礼」には「祈ること」と「歌うこと」がありますが、また次の機会に譲りましょう。「ことばの典礼」では、神のごとばを「告げる」方も「聞く」方も積極的な姿勢で臨むことが最も大切だと思います。そうすれば、典礼はきつとすばらしいものになり、「ことば」に集まった人々が神の国の喜びを体験する大きな助けとなることではないでしょうか。

(編集部・瓜生)

宇治教会の主任神父として、たびたび信者訪問をします。宇治の地図を利用して、地図の三つの中心の所、即ち、宇治教会、宇治カメル会の修道院、小倉のヌヴェール会の修道院をみます。この3つは特別な神様の恵みを発する所だと思えます。なぜなら、その3つの所は御ミサを捧げる所、御聖体のイエズス御自身の所などです。



恵みの
放射線を

みの程度が違うでしょう。けれども、もし、私は主任司祭として、ただ一人で専門の責任者として布教の仕事をしたら非常に救しく感じます。けれども、もし各キリスト者の赤い印をついている家から、何かの赤い放射線、即ち、神の恵みが出ているのを見まわるならば、希望があります。そうすると、宇治の15万人のまだイエズスのものでない方がだんだん神様を知るようになると思います。

宇治教会以外のこの記事を読んでいる方は、御自分の教会、御自分の家も神様の恵みの放射線が出るように考えていただきたいと思えます。よろしく。

ウォルケン神父(宇治教会主任)

小教区の頁



宇治教会

旧聖堂を支えていた高さ三米の側壁は戦後の質の悪さのためか、聖堂の床下に大きな亀裂が生じて聖堂の建物自体が傾きつつ倒壊するかわからない様な危険な状態になった。昭和47年初秋に神父様始め信者としても重大な決心を強いられる立場になったわけである。幾度となく会議を重ね、敷地の東側に聖堂を建替えることになった。

信者による聖堂建設の資金調達は、京都教区においては始めての例になったといわれている。しかし、信者が中心とはいえ、メリノール会を始め多くの教会関係者から絶大な協力があつたことは勿論である。

献堂式は昭和49年4月21日。司教様始め多数の司祭、宇治市の関係者方を迎え

たミサの途中、相憎、強雨に見舞われ天井のあちこちから雨漏りし始め、あわててビニールを張り廻してやっと雨漏れを防いだ。予算の関係上、屋根の半分を旧聖堂の古い瓦を転用したのが原因である。その時の模様を、当時主任司祭だったゴールマン神父の投稿から記してみよう。

「(前略)天井の到る所から雨が漏れ始めました。式に列席していた多くの信者の方々(それに来賓の方の多くも)が笑い出し、来賓の一人などは教会の中で傘を取り出されるといった具合でした。

このように私達の新しい教会のすべり出しとしてはあまり好調ではありませんでしたが、ちよつとした笑いをもたらしただことは確かです。そして「ちよつとした笑いのない生活など一体どんなものでしょう。」と付け加えられた。味わいのある言葉である。

献堂式の日からさかのぼること約6年前には宇治市の地域性からくる交通の不便さと、急激に人口増加した小倉地区の布教を目的として、この地の丸山百貨店の2階に「小倉分教会」が設立された。

現在その後建設された「ヌヴェール愛徳修道会」に引継がれ、毎日曜日には、主任司祭の出張ミサが捧げられている。大祝日、黙想会、総会等は本教会にて行事を行いお互いの親睦を計っている。同じく宇治教会所属の教会として、小幡地区には、「カメル修道会」がある。

宇治教会における部活動は壮年部が教会の運営に中心的役割を果たしてきた。といえよう。一方、教会行事の推進には婦

人の協力がどうしても必要であり、昭和52年4月第一回の婦人の集いが持たれた。続いて毎月第一日曜の定期会合が重なるにつれ、多くの婦人が参加するようになった。役員会への参加、クリスマスを始めとする祝日や、各種記念日のパーティー準備、来客の接待、日曜学校の協力等々その働きは目覚ましい。反面、次代を荷う青年部の活動は、淋しい状況にある。青年部の結成には、歴代主任が力を入れ、その育成に努力を傾注されてこられたが、必ずしも教会が期待する青年部像になり得なかった。

しかし昨年のクリスマス前から青年会が発足し、毎金曜日夜10人位の青年が楽しい集会を行っていることは誠に喜ばしいことである。又、ボーイ、ガールスカウトの活動も盛んである。また有志の方方によって「本教会はいかにあるべきか」をテーマに数回にわたって討論会が開かれ、特に信仰と布教の面で活発な議論が交わされている。

昭和55年9月23日、創立25周年記念式の司式による合同ミサは、世界平和への祈りであり、この地区の信者の魂に呼びかける信仰の愛熱への祈りであった。

25周年を記念して建設された、洞窟の「マリヤ」の足下に信者名簿や記念写真、教会史などを入れたカプセルが埋めこまれた。25周年後に開けることになっているカプセルを、私達の子供や孫はどんな感慨をもって開きみるであろうか。

(下城)



フィリピンの

キリスト者と生活して

伊藤武志

昨年末、九日間のフィリピン旅行の中で体験したいくつかの出会いを記したいと思う。先ず、マニラの市内のスラム街、トンド並びにマラテ地区を、その地域に

住む二人のフィリピン人シスターに案内された時である。マニラ市民でさえ、この地域にはあまり近づかないというので警戒心をもって入って行った私達を迎えてくれた住民の差し出す手と眼差しの暖かさは大きな慰めであった。聞けばこの二人のシスターの生家は、巨万の富を持つという。想像を絶する貧しい同胞と共に歩むシスターの姿は深く私の心を打った。

次の出会いは、バンブーチーチー（竹造りの教会）でのクリスマス真夜ミサにあづかった時であった。日本から訪れた私達を迎える聖堂内の人々の暖かい心は、その夜、一夜に作られたものではなかった。残念乍ら私は、日本の教会に於いてこれ程の暖かさや心の平安を感じたこと

はなかった。何十年も、この国に住んでいるような錯覚に落ち入り乍ら歓迎の手を差し伸べて来る人々の中にキリスト者としての真の出会いを味ったような気がした。

第三の出会いは、私達の今回の旅の最大の目的である。マニラから北へ、バスで八時間、イザベラの聖母訪問会の修院で働く、三人のシスター（その一人、Sr. 諏訪が、今回の旅行の現地の計画一切を立案して下さった）を訪れることであった。昭和初期の日本の農村を思わせる、ランブと木炭の生活の中で、私達を迎えて下さった、シスターズとの出会いは、感激であった。土地の人々の為に医療活動をし、共に喜び、ともに悲しむ献身的なシスターの姿は、そのまま、私達訪問者



への現地での歓迎となつて、村々の人々との素晴らしい出会いとなった。帰国に際し、その貧しき故に、携行した使用中の品まで贈って来たが、むしろ私達が与えられた霊的な贈物の如何に大きかったことか。その一つ一つを生かして行きたい。（西舞鶴教会）

ひとこと

◎貧しい人は幸せ等と云つては社会生活を生きるの事は出来ない、と人は云う。確かにそうでしょう。でもそこで、何かおかしいものがある。どうしても何か納得出来ぬものがある。キリスト者なら何か信仰の地に立つて、神の目で見直す事が出来ないものか。物質主義、拝金主義が実に巧みな姿で私達の心をむしばむ。唯一の神以外、神とするなど云う掟は最も中心的な掟ははずなのに。(A)

◎「ママこれ捨てるよ」と高三の長女。「もつたない」と私。「ママは時々ぐはぐな事をいう」とふくられる。無理はない。子供の目の前で野菜の固い所、買過ぎて腐らせたものをポイの日常生活。私の心の価値観を相手にいや応なしに強いてはいないだろうかと反省チョッピリ。

(吉田博子 富雄教会)

頼被りを脱いで

「戦後の日本の繁栄は、日本人の宗教に対する無関心と、関係がない訳ではない」とあったのを読んだことがある。我々の繁栄、生活苦からの解放、そして、それによって得られる精神的ゆとりは、ある意味では、良心に頼被りをするこ

とで得た代償ではないか、という訳である。これは決して

他人事でもないし過ぎ去った話でもない。例えば企業家、経営者にとって、その企業の存続は命と同程度か、時にはそれ以上に、重要なことと考えられている。企業が小さくなればなるほど、一層生々しさを帯びてくる。

彼等にとって、正義の尺度は金銭であり、その他の基準で測られた価値は、どれほど筋道が通つていて立派なものであるか、金銭に優先することは少ない。追い詰められた、これらの人々のとる極端な行動は、日々の三面記事を読めば、それほど珍らしくもない。一家無理心中

殺人、保険金詐欺……。良心の頼被り等は、日常茶飯事、朝飯前のごとである。彼等は「全き人」と言われる事は決してない。彼等は非難されるべきであろう。しかし、視点を変えて考えて見てほしい。彼等の、時には無理心中や、犯罪を

覚悟するほどの、この必死の努力で、多くの人々のレジャーや、日常の生活の成り立っている事を。ある国の、ある人々は「売春」の他には生きていく手段を探すことは、できないとも聞いた。信仰や教理は、今、現在生きていくものにこそ重要である。金銭が全ての、この社会の善し悪しはわからない。しかし、好む、好まざるにかかわらず、この世界に生きていかなければならない事だけは確かである。無関心を装おわなくてもよい信仰、頼被りをしなくてもよい確かな何かを得たいと願う者は、私一人であろうか。(き)

小さき者よ 国際障害者年に思う (2)

長浜教会 田中 謙次

実は私の娘(六才)は先天性代謝異常児なのです。よくあることです

が、善良そうなおばさんが「お嬢さん、これ食べな」とおいしそうにケーキを手渡ししてくれます。「この娘は病気で、きびしい食事制限がありま

すので……」と断つても、なかなか聞いてくれそうにありません。相手が善意の人だけに余計厄介なのです。

このくらい違いは、私が障害者に接する時にもよくあることです。先日も車から降りようとする彼に「おぶっていきましょう」と声をかけました。松葉杖も車椅子もなさそうなので、おぶっていくのが当然だと思つたのです。ところがどうでしょう。彼は、しゃがんだまま両足首に両手をそえて、ヒョコヒョコと私宅の低い塀を越え、家に入ってきました。彼は仏壇に金箔を塗る特殊技術者として立派に自立しているそうです。こうした「思いやり」のくい違いは誰にも経験があるでしょう。でも、その相手と何回も接することによって、この種の「くい違い」は克服出来るものです。本紙の前号で伊達さんは「でも障害者年

はあなた方、健康な人の年でもあるのですよ。一緒に「完全参加と平等」のテーマに取りくまねば……」と言っておられます。

しかし、障害者年は本当に「一緒に」とりくまれているでしょうか。障害者スポーツ大会、△△表彰等々、お祭りの行事も大切でしょうが、どこか「障害者のための年」という理解に留まっているような気がしてなりません。「くい違い」はいつまで続くのでしょうか。

交通事故や薬害、高齢化による障害は他人事ではなく、自分も明日は障害者になるかも……と切実に思つたことがありますか。しかし、事実はもつときびしいのかも知れません。障害者と健全者という区別意識そのものが、既に私もあなたも障害者であることを示しているのかもしれない。障害者を社会の一員として特別視しない社会が実現するには、まだ遠い道程を必要とすることでしょう。

施設の充実、環境整備、障害者雇用促進法の徹底等々、まだ私たちが考え、実行に移すべきことが多くあります。しかしその前に健全者である私自身が、実は精神的に自立出来ない甘つたれた障害者ではないかと自問してみる必要があるようです。

教会内では「共同体」の一員であると言われながら、今だに聖職者におんぶされる甘つたれた障害者であり、無理矢理にも相手をおんぶしようとする聖職者も実は見事な障害者であることを共に考えるべきだと思つたのです。

教会統治は司教が掌握し、司教は代理人である司祭に自分の権威を委任し、信徒はひたすら素直に従う——こうした一種のカースト制に対して、全員参加の共同責任性を、もつとつくり認識すべきだと思ひます。一方には重要事項に関して参加権もなく、参加しても大抵の場合、決定権がないという「共同体」に甘んじているのは、やはり一種の障害者ではないでしょうか。

相手だけを障害者扱いする偏狭な考えから脱却出来ない自分、障害者扱いされることに甘んじている自分——こうした環境を打破するにはたしかに時間がかかります。しかし滋賀県を中心とした「粉せつけん」運動は、見事に成功しました。搖ぎないと思われた日本の大企業にも、着実に変革がもたらされています。

国際障害者年は障害者のためであるというよりも、私たちはみんな、ある分野では現に障害者であることを認めるところからはじまるのではないのでしょうか。そこには「愛」を説くと同時に、共同体の正義が侵かされている部分を取り戻す姿勢が要求されているのです。



(承認番号A-0075)



時報が対話
の手段なら
ば、「互いに
心を開けあ
も編集者も。

◆トネルを出ると……雪国の書き出しではありません。復活の朝のマリアの事を想っています。そこに大輪の花でなく朝日に照らすみれの喜びを見たいのです。(MT)

◆司教教書の特集した。締切前一週間は「割付け」が夢の中にまで出てきた。どうせなら教書の内容を夢見たかったのになあ。とにかく今月は大変でした。(J)

◆およそ教会の教の字にも関心を示さなかつた日本人にまで、ヨハネ・パウロ法王は静かなアームに火をつけて去る。温い、相手を包みますにはいられない広さ、深さ、そして祈りの姿に、あゝビバババノ(Y)

◆若いということとはとてもいい、ことです。ね。時報編集にあたり一番一生懸命にぶつかつて、完全なものに向つて行く「さ」の姿勢。いいですね。……(I)

◆「このアオイの何?」「へエ、教区時報」「イメージかわつたね」「でも、中身は?」……「常に刷新と対話の時報やで、期待してや」(重)

これが私の今の気持 (き)

本紙を福音宣教に役立たせるため、ご近所、お友だちにもお見せ下さい。